

第3章 一〇〇号記念 爽樹合同歌集より

以下、爽樹合同歌集の「あとがき」より一部を引用。

『爽樹』合同歌集をお届けします。

掲載されている作品は歌詞「爽樹」の創刊号から九十号までに載った歌の中から各自の選択によるものです。

この八年余、一緒に学んだ会員の皆さんの作品にあらためて接し感無量です。「爽樹」発会時の趣意書に「小さいながらも自らの発表の場を持ち、一人ひとりが光となってお互いの照らし合い研鑽しよう」と記しましたが、その成果がこの歌集に示されていれば幸いです。

また、この歌集は爽樹短歌会のひとつの通過点であり、今後に向けて会員の皆さんの勉強の資として役立てて頂ければ更なる喜びです。

平成十七年七月 平川省吾

アオモジの花

一九二七年東京生まれ。四四年夏疎開で父の郷里の長崎県内の小さな村に転住。

小学校中学校に十年余勤務。その後は主婦、今は主人と二人暮らし。

九〇年、平川先生のお誘いをいただき「紅霞」に入会、引き続き「爽樹」の会員となり現在に至る。

立春の過ぎて光の増しし空ふいに小綬鶏鳴くが聞こゆる

うぐひすの初音聞こえぬ沼へだつ山より未だととのはぬ声

夕風の海を眺むる堤防の下に音して牡蛎打つ人ら

庭木々の倒れむばかりに吹き荒るる春一番のほのかに温し

島山に春の先触れをちこちに黄を滲ませてアオモジの咲く

「免状花」「卒業花」といふ三月の島山に咲くアオモジの花

新緑の島山おぼろに霞ませて黄砂降るなり昨日も今日も

かすかにも雨降るなかに純白の泰山木の花ひらきそむ

わが家へとのぼりゆく径合^{ねむ}歡の葉の頭上を覆ひ花浮かび咲く

潮入りの小沼の水の動くとき合^{ねむ}歡の散り花ただよひてゆく

磯辺より庭に移ししハマボウの黄の花すがし夏の朝あさ

槇の木の根方に自づと育ちるし鹿の子百合咲く夏の朝に

風来れば白き葉裏のそよぐ木々花と見まがふ晩夏の山に

台風は逸れて去りたり夕べ見る沖空妖しきまでのくれない

秋の日の昼のしじまに法師蝉終りの声か遠くかすかに

季ときならず咲く花にして島山に秋のさくらは寂しさまとふ

灯を消せば障子を透し仄明かり夜更けの庭を月照らすらし

ふた本の柵の木に花満ちて夕べの庭を香のひたしゆく

元旦の庭暖かく枇杷の木に残れる花がかすかに匂ふ

裸木のイロハモミジの細枝のこぞりて紅く冬庭に在り



弟・侃家族やはつひ夫婦と



息子三人と義甥・好寛君



三男と飼っていた犬・アキ
(日ノ浦の町営住宅前、左はポプラの木)



日ノ浦で
(昭和51年頃、城ノ越が見える)



弟・武征家族他と



母・小川カズの若い頃



妹・節子夫婦と母



母・カズ



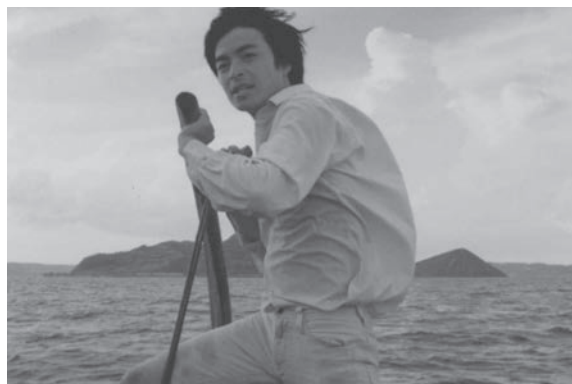
息子3人（日ノ浦の町営住宅前で）



息子3人（日ノ浦の町営住宅の前で）



弟・武征（長男と台風で鷹島へ流された帰り）



台風で鷹島へ流された帰りの長男（後ろは飛島）